

外国につながる高校生が主体となる活動を通じた学び —多文化子ども食堂の実践から—

唐木澤みどり (学習院大学)

1. 実践の目標と実践の場の特徴

筆者が関わる NPO では、子ども食堂や学習支援教室等の活動を行っている。それらの活動には、多くの外国につながる子どもたちが支援の対象として参加している。だが、特に高校生の場合、キャリア教育や市民性教育など、社会の一員として自立し、社会に働きかけ、変えていこうとする力を育むことが重要であり、そのためには彼ら自身が主体となる活動を通して、認知能力だけでなく、非認知能力を育むことが必要だと考える。

本発表では、NPO の通常の活動とは別に行われた多文化子ども食堂の実践を報告し、活動の主体として参加した外国につながる高校生の非認知能力を含めた学びについて考察する。多文化子ども食堂は、外国人当事者が料理の準備段階から主導し、参加者と共に料理を作って食事をするという交流を通し、参加者に外国人当事者の文化を知ってもらい、相互理解に繋げることを目的としている。過去に行った多文化子ども食堂では、子どもの親が料理作りの主体となって活動したが、今回は学習支援教室に通うネパールルーツの高校 1 年生の女子生徒 2 名 (R と U) が、準備段階から参加することになった。NPO の担当者 A さんが普段から家事を手伝っている二人に声をかけたところ、非常に関心を示し、二人の提案によりその場で当日のネパール料理のメニューも決まった。

R と U は、来日時期は異なるが公立中学校へ 2 年時に編入しており、日本語や学校での学習に自信が持てないことも少なくなかった。例えば、中学 3 年時の学習支援教室の振り返り記録からは「式があれば解けるが、文章から式を立てるのは難しい」「テストにルビを振ってもらおう頼んだ」(U)、「数学の問題文をネパール語で説明するとわかる」「小学校の漢字をカードで練習した」(R) など、日本語に苦労しながら熱心に勉強していた様子がわかる。

2. 実践「多文化子ども食堂」の概要とその過程

2-1 実践の流れ

実践期間 (準備から振り返りまで) は、2024 年 5 月 15 日から 6 月 17 日までで、以下のような流れで実践を行った。当日は、幼児から大人まで多様な年代の様々なルーツ (ネパール、日本、中国、フィリピン等) の人が計 44 名参加した。

表 1 実践の流れ

実践の内容 (場所)	具体的な活動	参加者
(1) 事前打ち合わせ①	・ 自己紹介の練習 ・ 料理の作り方や買い出しの材料確認	高校生 2 名 A さん, 筆者
(2) 買い出し	・ 打ち合わせでリストアップした材料を手分けして買い出し (ネパール料理特有の材料は、高校生 2 名と A さんで買い出し)	高校生 2 名, A さん, 筆者他
(3) 事前打ち合わせ②	・ 料理の説明のための相談と料理の説明原稿の作成 (当日までに各自で発表練習することを約束)	高校生 2 名 A さん, 筆者
(4) 多文化子ども食堂 当日	・ 9 時: 準備開始。・ 10 時: 料理からの参加者と料理作り ・ 12 時 30 分: 高校生による料理の説明後、食事会開始。 ・ 14 時: 片付け後に親子で分かれて交流会・ 15 時頃: 解散	高校生 2 名 A さん, 筆者 その他参加者

(5) 振り返り①	・ 高校生 U との実践の振り返り	高校生 U A さん, 筆者
(6) 振り返り②	・ 高校生 R との実践の振り返り	高校生 R, 筆者

2-2 実践の様子

事前打ち合わせ(1)(3)では、主に U が日本語で料理の材料や作り方を説明し、R はネパール語を交えながら補足したり、修正したりしていた。ネパール特有の材料は、A さんと R と U で買い出し(2)に行った。材料を見極め、値段交渉をする二人に A さんは驚いていた。

多文化子ども食堂当日(4)は、R と U、当日から参加の外国人親 1 名が料理を主導した。参加者に教えながら一緒に料理を作ったり、小学生にやりたい作業をさせてあげるなど、参加者と上手に関わる様子や、作業者の増員を提案するなど全体を見て手順を変更するためのやりとり等、自ら考え、行動する様子が観察された。二人が食事の前に行った料理の説明は考えていたようにはできなかったが、温かい拍手をもらっていた。後日、R と U は別の日に振り返り(5)(6)を行ったが、二人とも参加した意義を感じ、今後について提案するなど、積極的な発言をしていた。

2-3 主体となる高校生への支援

R と U が主体として活動するための支援として、準備段階では、メニュー、材料、作り方など二人の意見を取り入れて料理の説明の原稿や料理のレシピ表を作成し、日本語で説明するためのサポートをした。多文化子ども食堂当日は、料理や料理の説明等の主体としての活動をサポートし、振り返りでは、彼らの意見や考えを引き出すことに留意した。

3. 成果と課題

3-1 振り返りから

振り返りの二人の語りを非認知能力(遠藤 2017)との関連から整理した。成果としては、日本でネパールについてあまり知られていないことへの疑問があり(動機づけ)、今回の活動を通して知らせることができ、喜んでもらえてよかったと思っていることや、家庭とは違う環境の中でも、他者と協力しながら料理がうまくできたと感じたこと(自己効力感・向社会性)、課題としては、練習不足もあり日本語での料理の説明が難しかったことや、もっと準備が必要だと感じたこと(セルフコントロール)等が挙げられる。

準備段階では日本語で料理の説明がほとんどできなかった R が、振り返りでは、今後みんなと作りたい料理名や材料名を流ちょうに話せるようになった。また、二人とも料理以外の文化についても自分の意見を述べていた。活動への参加を通じた非認知能力の醸成とそれに伴う学びが日本語でも発揮されるようになったのではないかと考えられる。課題としては、料理の説明や料理の手順等の準備の必要性への認識とそのための支援である。

3-2 今後に向けて

成果と課題を受けて、地域の日本語学習支援の中で非認知能力を育てるための提案として、子どもたちが生活の中で何について不満や疑問を抱いているかを探り、その解決方法やそのための活動について、準備段階を含めて彼ら自身が主体的に考え、行動することを支援し、認知能力と共に非認知能力を育てていくことである。そのためには、今後さらに彼ら自身が主体となって参加できる活動を通じた学習支援を検討していくことが必要である。

【引用文献】

遠藤利彦編(2017)『平成 27 年度国立教育政策研究所プロジェクト研究報告書 非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-2-1_a.pdf